

セノイ族の夢の文化

悪夢にうなされる夜から逃れたいわたしは、日常の団樂のなかで夢について語り合い、健康な精神生活をおくる民・セノイ族を、マレーシア中央高原のジャングルにたずねた

おおいずみみつなり
文・大泉実成
(ノンフィクション作家)

よしだ かつみ
写真・吉田勝美
(写真家)

ジャングルの朝。濃い霧のなかにバンブーハウスがたたずんでいる

大昔の中国の言い伝えによると、「狼」という動物は悪夢を喰らうんだそうである。豊臣秀吉の枕元には、この狼の絵が描かれていたという話だ。いまために辞典を引いてみたら「ゾウの鼻、サイの目、ウシの尾、トラの足をもち。悪い夢を食い邪気をはらう」という伝説がある」とある。なにがなんだかよくわからないような動物ではあるが、悪夢を喰うだけでなく邪気まではらうというんだから、なかなか大したものだ。それにしてもいつごろからこんな伝説があるのか？ 読者の皆様はひとつご指南をいただければ幸いである。

深夜、夢でうなされて、夢から逃れるようにして目覚める。これはあんまり気分がいいものじゃない。けれどわたしも悪夢をよくみるほうで、締め切りに間にあわないで雑誌に白いページが出そうなときは、刺身包丁をもった編集者に追つかけるなんていう夢をみたりする。「俺の原稿で紙面を汚すよりは、白いページに絵でもなんでも描いてもらったほうがよっぽどましだ」なんて開き直ればいいのだが、あいにくそういう凶太い性格はしていない。

それにしても、日常生活だつてたいい口くなこととは起こらないんだから、せめて夢ぐらい楽しくてもよさそうなのである。それがどういいうわけて悪夢なんかをみなくちゃならないのか、精神分析で有名な岸田秀先生(和光大学教授)に聞きに行ったことがある。先生はいわゆるフロイト流だが、わたしの素朴な疑問を聞いて、それは葛藤のせいだ、とおっしゃった。「あなたのなかで抑圧された精神的葛藤が夢になって出てきているんだから、その葛藤の原因を分析しないといけないね」。しかし、である。わたしは三〇歳であるが、どういいうわけかゴジラだのガメラだのに追いかけられる夢をよくみる。だが、いったいこ

れはなんの葛藤のあらわれだというのだ。考えても考えても素人には見当もつかない。岸田大先生は「怪物は父性の象徴である場合がおおいね」なんておっしゃったが、どうもなんとなくいえず、思わず眉につばを塗りたくってしまふ。そこで今度はユング流の小川捷之先生(上智大学教授)に話を伺いにいった。すると先生、「いやー、心理的葛藤というのは大切なもので、葛藤がなくなったらその人の進歩もなくなってしまう。だから大いに悪夢をみたほうがいいんじゃないですか」と何々大笑された。先生、そんなことはおっしゃいますが、夢のなかで怪物にバリバリ喰われちゃうというのは、じつに情けないもんなんですよ。まったく他人のことだと思つて。

そんなわけで、フロイト流の象徴も信じられず、かといつてユング流に「悪夢大いにみるべし」とも達観できないような俗人のわたしには「狼」みたいに都合よく悪夢をバクバク喰つちまってくるような奴はおらんかねえ」という嘆息があるのみであった。

「夢をコントロールする」入びと

ところが、である。

そういう都合のいいことをやっていると連中がマレーシアのジャングルのなかに住んでいると、あるとき心理学をやっている友人が教えてくれた。なんでも「セノイ族」というその民族は、夢をコントロールする技法をもつていて、その方法によって悪夢を良夢に変容させることができるというのだ。マレー半島の中央高原地帯に、六つの部族にわかれて住ん



山の斜面に建てられたセノイ族のバンブーハウス。子どもたちが窓から顔をのぞかせている。この部屋は地上4メートルくらいのところにあり、竹の床が抜けたらどうしようかとびくびくしていた。風とおしは最高

でいて、モン・クメール語系の言葉話す民族らしい。

その友人が話のタネにしていたタネ本を探してきて読んでみた。アメリカの心理学者、パトリシア・ガフィールドの書いた『夢クニック』(花野秀男訳 白揚社 一九八四年)という本である。

ガフィールド女史によれば、セノイ族の夢の見方の基本的なルールは次の三つ。

1 夢のなかでは危険と立ち向かい、敵があらわれたらこれと戦って打ち勝ちなさい。

2 夢のなかでは快楽をめぐって進みなさい。

3 夢のなかでははつきりした成果(贈りものなど)を手に入れなさい。

で、これが夢をコントロールして悪夢を良夢に変える秘訣だ、とガフィールド女史は力説する。

ただちょっと待って欲しい。だいたい夢なんてものはやられ放しのものである。わ



たしなんかトラに追われて逃げたくても足が動かないとか、憎い野郎をぶん殴ろうとしても手が動かないとか、そんな動くに動けない悪夢を山ほどみている。それを「敵と戦え」とか「快楽を目指せ」だの、よくもまあ簡単そうにいうもんだ。そうそう都合よくいくわけがない。

とまあ、こんな具合に反発しながらこの本を読んでいくと、ほかに「夢のなかでは友だちをもちなさい」とか「落ちる夢は、おちついて対処すれば、飛ぶ夢に変えることができる」なんて教えが書いてある。「たとえ近親相姦であっても、夢のなかで人は過剰な愛を得ることはないので、快楽を味わいくつしなさい」という教えもあって、正直なところ「おいおい本当かよ」というのと「うーん、そんなもんかねえ」というのが半々、という心境だった。

ただ「待てよ」と思ったことがひとつある。それは、ときどきわたしが夢のなかで「コレハ夢だ」と気づくことがあるのを想いだしたからだ。あとから調べたら、こういう現象を「明晰夢」とよぶんだそうだが、そうか、こういう夢のときに夢のなかで好き勝手をやればいいのかわかるとそのとき考えた。

それから数日後、夢をみていたら、夢のなかで「コレハ夢だ」と気づいた。しめた、と思っ、なにか好き勝手なことをしようと考えた（この辺、筒井康隆の「だばだば杉」みたいだが）。そこでとりあえず空を飛んでみることにした。すると嘘みたいな話だけど本当にスイスイ飛べるのだ。スーパーマンみたいに両手を伸ばしてギューンと飛んで行くと、最高に気分がいい。気がつくときそこは新宿の高層ビル街。夜の西新宿。赤や青や緑の灯がキラキラと輝いて、なんともいえず美しい。そこをビルの谷間をぬいながら縦横無尽に飛

われわれが世話になったチャンカー村の村長、バガリンダムさんのバンブーハウスのなか。めいめいがくつろいだり、仕事をしたりしている。まるで空を飛んでいるような部屋で、下から光がはいってくる



ぶわけだから、こんなに気分のいいことはない。
それ以来、明晰夢がおとずれると、わたしはなるべく夢のなかで好きほうだいをしようとかんばった。「快樂を目指しなさい」というものもやってみた。夢のなかに出てきた可愛い女の子を片っぱしから口説いたのである。おもしろいことに、うまくいくと最後の最後の行きつくところまで行くのだが、なにせ相手のあることで、そうそううまくはいかない。夢のなかで夢だと気づいて「さあ女でも口説こうか」と思っただと周囲をみまわすと、まわりの女は人三化七ばかり、なんてこともあった。

まあこんな具合で、気がついてみたらわたしは随分とセノイ族の夢の見方を自分の夢生活のなかに取り入れていたのである。もちろん、いつもいつも悪夢が良い夢に変わるわけではない。けれども、心のもちようが変わったせいか、消極的な夢や、やらせつ放しの悪夢が圧倒的に減ったのである。
多分、セノイの夢理論を知ったこと以外にも、悪夢が減ったことには、年をとって脳みそが減り、図太くなったとか、人間関係の変化とか、ほかに理由はあるのかもしれない。だが、なにより、夢をこちらから変えてやろうと、態度が積極的になり、夢を楽しみに待てるようになったのは大きかったと思う。ご難

つづきだったわたしの夢生活に一筋の光明をもたらしてくれた、というわけで、わたしはまだあったこともないセノイ族の人たちに、なにか恩義のようなものまで感じてしまったのである。
こうなってくると、わたしもノンフィクションライターのほしくれ、かれらにあってみないとどうにも気がすまない。体が納得しない。そんなわけで昨一九九一年三月、第一回目の取材旅行に旅立ったのだった。
夢予知のサインが大きな源泉
だいたい取材というものは、こんなこともい

これ予想を立てていくものだが、たいてい裏切られる。そこにまたノンフィクションの仕事の醍醐味もあるのだが、このときもそうだった。
「夢をコントロールする」だの「悪夢を良夢に変える」だの有名なセノイ族だから、まずそういう話が出てきそうである。ところが、かれらとファースト・コンタクトをしてみてもまず出てきた話が「夢のサイン」というやつであった。たとえば「前歯が抜ける夢をみると親族が死ぬ」とか「木が倒れる夢をみると病気になる」とかいいたもの。
なあんだ、というのが第一感。こんな話なら日本にだっていくらでもある。
ところが、話を聞いていくうちに、どうもこれらの夢のサインへの「入れこみ」具合は、日本人のそれとは相当ちがうな、と思えてきた。たとえば、知り合いになったセノイ族のアポとかれの家で話していたときのこと。夕方乾期には珍しく豪雨がきた。
「じつは今朝、飛行機が墜ちる夢をみたんだ。これは、エアプレーン・クラッシュ」といって、セノイ族では、この夢をみると夕方豪雨になるといふんだ。
アポはしたり顔でいった。
この例からもわかるように、セノイ族の夢のサインというのは、第一に、とても日常的なのである。さらにアポの話の聞いていくと、夢のサインには二種類あるということが判ってきた。
「アダム（アポの友人）にとつて、ヘビの夢は家族が病気になる、というサインなんだ。だけど、ばくにとつてヘビの夢はとてもいい夢で女の子にもてたり、ジャングルに行くという獲物がとれたりする。こんなふうには、おなじ夢をみても、一人ひとり意味がちがうんだよ。」

←ドリアンの木に登る青年。ジャングルの果樹には、持ち主が決まっている木と、自由競争の木があるという



↑→炉をつくるおばあさん。まずは幅のあるブリューという葉を丁寧に編む。その葉で床をつくり、そこに赤土を載せ、踏み固める
←モチゴメをココナツミルクといっしょに竹筒で炊く。これはマモーといっ、たいへんなごちそう



←ウピカユ(キヤッサバ)の葉をもつ子どもたち。ゆでたり炒めたりして食べる。現地の材料で何種類かテンプラをつくったが、この葉っぱのテンプラは美味。
↓イモを掘る女性。これはウピカユではなく、日本のサトイモに似たイモだった



↑ジャコウネコの肉を、ウピカユと香草といっしょに竹筒に入れ、火にかけてできた料理



夢のサイン、とは、まあ一種の夢予知である。かれらの話を聞いてると、夢のサインには、病気や死、狩りや自然現象に関するものが圧倒的におおかった。かれらにその理由をたずねると、「自分たちの生活にとって、狩りで食べものを得られるかどうか、病気になるかどうかはとても重要なんだ。だからそれを夢と結びつけるのさ」と答えた。小規模な焼畑をおこなっているとはいえ、まだまだ狩猟採集が生活の一部を占めるセノイ族。そんなかれらにとって、狩りのための情報を自分の夢からみることがとても重要なことだろう。

「たとえばミツナリがトラの夢をみたとするだろう。そうしたら二、三日のあいだ自分になにかおこるかじっくり観察するんだ。そしてカゼをひいたとする。」
次にトラの夢をみたら、また自分になにか起るか観察する。そしてまたカゼをひいたら、トラの夢はミツナリにとってカゼのサインなのさ。」
夢のことを憶えているだけでもたいへんなのに、それを念頭に置いてじっくり日常生活を観察しろという。これは簡単そうだが、なかなかできないことだと思う。

つまり、セノイ族の夢のサインのなかには1 共同体に共通のサイン(歯が抜ける夢、エアプレーン・クラッシュなど)
2 共同体の成員に固有のサイン(へビの夢などの二種類があることになる。
特に「こいつら夢に対する思い入れが強いな」と思ったのは2の個人的なサインの話を聞いたときのことだった。1のサインは、日本にだって、「富士、二鷹、三なすび」みたいなものがあってわかりやすいが、2のサインはどうやって成立するのか。アポはこう教えてくれた。
「たとえミツナリがトラの夢をみたとするだろう。そうしたら二、三日のあいだ自分になにかおこるかじっくり観察するんだ。そしてカゼをひいたとする。」
次にトラの夢をみたら、また自分になにか起るか観察する。そしてまたカゼをひいたら、トラの夢はミツナリにとってカゼのサインなのさ。」



また、医療の充分でないかれらの生活では、夢で病気の兆候を予知し、それを未然に防ぐことも大切であるにちがいない。

アメリカの文化人類学者キルトン・スチュアートとのセノイ族に関する報告や、先ほどのガーフィールド女史の書いたものを読むと、セノイ族の夢文化の中心を夢コントロールに置いてしまいたくなる。しかし現実にはわたしのみた範囲では、かれらの夢文化は、この夢予知のサインを大きな源泉としていた。

それにしても「夢で飛行機が墜ちたら雨が降る」だの「木が倒れる夢をみると病気になる」だの、夢の超能力をまったく信じないわけではないがあまりにも単純明快、いやいささかそそっかしいぐらい短絡的とはいえない

か。わたしはかれらの話を相槌を打って聞きながら、やはり心のなかでは眉につばを塗るまくっていた。

ところが去年の取材のとき、わたし自身この「エアプレーン・クラッシュ」の夢をみたのである。そして冗談のような話だが、その日の夕方からとんでもない土砂降りになってしまったのだ。おかげで夕方の予定がつぶれたうえに、村のバナナの木は折れるわ、家は倒れるわで、ほとんどわたしは疫病神扱い。これには本当にまいりました。

追いかけてくるトラは友人なのだ

さて、それでは肝心の「夢コントロール」はどうなのか。セノイの連中に「きみたちは夢

をコントロールするそうだね」と聞いてみると、みんな不思議そうな顔をするだけ。そこで今度はやり方を変えて、実地にわたしの悪夢を聞いてもらった。するとなにやら夢コントロールらしき反応がある。たとえば、メンドロ村のセノイ族の長老・クチルじいさんに話を聞いたときのこと。

大泉「じいさん、じつはわたし、トラに追いかけて木の上に逃げる、という悪夢をみるんですがね。これはどうしたらいいんでしょうね」。

クチルじいさん「それはいい夢をみたもんだ。おまえさんの話を聞いているとトラが何度も出てくるようだが、それは、そのトラがおまえに興味をもって、仲良くなりたがっているんだ。だからおまえもトラを恐れずに、友だちになるようにしなさい」。

じいさんはこのほかに「夢のなかでトラが贈りものをくれることがあるから、もらっておけ」とか「夢のなかのトラに話しかけると、トラが人間に変身することがある。これはとてもいい夢なのだ。だから話しかけてみなさい」などと教えてくれた。

このほかにもたくさんセノイ族の人にわたしは自分の悪夢の話をした。かれらの悪夢に対する指導は、まとめてみると次のふたつに集約されると思う。

1 夢のなかでは意識して積極的であるようにしなさい。

2 夢のなかで出会った相手とは、できるだけ



友だちになりなさい。

このふたつを守れば、夢のなかの相手は、有用な情報やパワーを与えてくれる、というのがかれらの考え方だった。

ガールフィールドのように「夢のなかでは敵と戦え」という者はいなかったが、全体的には彼女が報告した「夢コントロール」と重なっている。かれらは外来者のわたしにもこういう夢指導をしてくれたし、またみずからも

それを実践しているのだから、やはり、夢をコントロールする民族」とよんでもよさそうである。ところがセノイの人たちは「自分た



↑吹き矢を吹く子ども。矢筒には美しい模様が彫られる。セノイ族の男たちのプライドの象徴のようにも思える。射程距離は約20メートル。矢の先にはから採った毒をぬる。サリス、モモンガなどを獲る



←セノイ族のヤナ。雨が降って増水したときに、ナマズなどの大型の川魚が獲れることがおおいという

ちは夢をコントロールしている」とはいわないのである。

まったく「なんでこうなるの」という感じで、わたしはこんがらがったタコ糸みたいな謎を解明できないまま、第一回目の取材旅行から帰ってきたのだった。

四人組の前途に待ちうけるもの

とにかく、謎を謎のまま残しておく、となんとなく体の調子がよくない。寝ざめが悪い。かといって、日本にいてはなにも解決しない。そんなわけで九二年の、つまり今年三月、



↑しかけワナ。かれらはジャングルの材料をあっというまにこれだけのものをつくってしまう。このワナで、マメジカなどの小動物を獲る

←石の下に小魚を追いかみ、網で捕らえる。美しい川で、水底まで1メートル以上あるのだが、川底の様子がよく判る

た。しようこりもなくまたセノイ族にあいに行

飛行機に乗って、もうどんどんマレーシアに行ってしまう。まずは首都のクアラルンプールへ。

今回のスタッフは四人。

通訳をしてくれるのは歯科医の北村豊先生。先生は七七年から三年間、青年海外協力隊員としてオラン・アスリ(セノイ族を含むマレー半島の先住民の総称)の歯を治しつづけた。マレー語はペラペラで、セノイ族たちの信頼も厚い。昆虫キチガイ。三度のメシよりジャ

ングルが好きで、短パン二丁に吹き矢をもって、セノイたちと獲物を追ってジャングルを駆けめぐるといってお人柄である。しかも空手の有段者で、車の運転もバリバリである。去年もお世話になり、気心も知れている。最強の助っ人。

カメラマンの吉田勝美さん。世界の辺境をくまなく歩いていて、行ったことのない国を教えたほうが早いという、通称「辺境カメラマン」。はじめての村にはいって、身ぶり手ぶりの下ネタで村民を笑わすのと、からかいたが子どもを手なずけるのが天オチにうまい。取材に関してゆたかな経験をもっているのが教わる事がおおく、一方的に「師匠」とよばせて頂いた。

週刊誌「SPA」編集部の高田功さん。その編集長をして「ウチの雑誌の片翼を担う」といわしめた大器。C級シリーズなどを手がけている。温厚かつ誠実な性格で、おシヤカさまのような慈顔で人を安心させる。

そして最年少がライターのわたし。クアラルンプールの常宿「ホテル・マラヤ」に落ち着く。周囲のチャイナタウンには、唸るほど旨い屋台料理がある。二回目なので、トントンとジャングルにはいる用意が運んでいく、と思われた。そう、ほとんどのことはうまくいったのである。

怖るべきはマレーシアのレンタカー屋であった。昨年、レンタカー屋で4WDが借りられず、止むを得ずブルーボードでジャングルにはいるという無謀を犯し、山道で何度も立往生したわれわれは、今年は慎重に慎重を期した。一カ月前から国際電話でレンタカー屋

に4WDを確保してもらい、万全の態勢でマレーシアに乗りこんだのである。ランドクルーザーのロングタイプ。荷物をたっぷり積みこんで、まだ余裕があるというこの車で、われわれは勇躍、ジャングルにはいるはずだった。

ところが、三月五日、明日からジャングルという日の朝「ランドクルーザーは故障がみつかったので修理にだした」という連絡がはいつた。冗談じゃない。どうしてわざわざわれわれに貸す直前に故障がみつからなければならぬのだ。おおかた直前になって、政府高官のお得意さんから「ちよつと週末キャンプに行きたいんだけど」とかなんとか、注文がはいつたにちがいない。

しかし日本人をナメてもらっては困る。さんざん粘った調整係の高田さんと先生は、そのレンタカー屋にクアランプールじゅうのレンタカー屋を当たらせた。その結果、「パジエロが一台確保できました」という朗報がはいつた。やった、とわたしたちは歓声をあげ、胸を撫でおろしたのであった。

夕方、クアランプールの取材から帰ってくる、またレンタカー屋から連絡がはいつていた。パジエロが、レンタカー屋に帰ってくる途中で事故に遭い、修理工場に行ってしまったというのだ。「そんなバカなことがあるか、なんてそんなに都



伐採の結果、むきだしになった赤土。雨期には豪雨がつつくので、土砂崩れが起りやすい。熱帯雨林がいかにか繊細なものがよく判る

合よく事故に遭うんだ」とわれわれは激怒したが相手は事故に遭ったの一点ばり、どうすることもできない。レンタカー屋は、「とりあえず全力を尽くして車を捜しますが、もしきょうから使いたいなら、一応車をもって行きますしどうか」という。車はなんだと聞くとライトエースだという。バカな、そんな車でジャングルにはいれるわけがないじゃないかと怒ったが、この調子ではいつ車にありつけるか判らない。とりあえずキープしておこうということ、夜、ライトエースをもってきてもらった。

車をもつて契約にやつてきたのは、銀ブチメガネをかけ、ゴールドのネックレスをしたいかにも目はしがきそう、こすつからそいうな中国人のいちやん。信じるものは金だ

けです」という顔をしている。嵐のようなスピードで電卓を叩き、ライトエースのレンタル料の前金をふんだくると「ベストを尽くして4WDを捜します」と誓い、力強い握手を交して去っていった。

翌朝、われわれが山ほどの荷物を一五〇〇CCのライトエースに積みこみ、山道で一〇〇万回立往生することを覚悟しつつ、泣く泣く旅立ったのはいうまでもない。なにがベストを尽くすだ。

まあそんなことをいっても、忙しい東京を抜けだして、気が知れた男ばかり四人での気楽な車旅である。道の途中で、チェンポダのドリアンだの仏頭果だの、珍しい南国の果物を買ひこみ、フツフツと種を窓から吹き飛ばしながらの道中。なにせ最近の東京の忙しさときたら、目まぐるしいを飛び越えて目が眼精疲労で点になってしまいうぐらいのものだ。外国での解放感もあつて、久しぶりにのびやかな気分である。われわれのライトエースは、ジャングルを目指して、北へどんどん走った。結局その日は、マレーシアの中央高原地帯にあるリゾート地、キャメロンハイランドで一泊した。

翌朝、現地の先住民局へジャングルにはいる許可証を取りに行った。局長さんはドクタ―北村のふるい友人でわれわれを歓迎してくれたが、われわれがライトエースでジャングルにはいるというと、大きな腹を抱えて「ハッハハ」と笑った。そして急に心配顔になり、ジャングルの伐開道路は大型トラックが木を運ぶので最近ますます大荒れ、倒木や落石がごろごろ転がっていて、ランドローバーでもはいるのは難しいのに、ライトエースじゃあとてもと、とたしなめにかかる。ちくしょう、レンタカー屋めえ……。

しかしここまできておめおめと帰るわけにはいかない。大の男四人が困ったような顔でむつり黙りこんでいるのを見て、局長さんもさすがに気の毒に思ったらしい。電話であれこれ問い合わせさせてくださる。そして、ジャングルへきようはいるというランドローバーの定期便に話をつけてくれた。やった、これで懐かしいメンドロ村の連中にあえる。

伐採が進むジャングルと赤い川

昼食をとつてから、ランドローバーでジャングルに向かう。この車もなんだかベトナム戦争のころから使っているようなボロボロな車だが、やはりパワーがちがいがい、きつい傾斜を楽らくとあがっていく。

途中の川がまつ赤だ。ガイドをしてくれるアダムに

「レット・リバー」というと、

「イエス」と答えた。伐採が進み、ジャングルの赤土が流出して川へ流れこんでいる。まるで赤いコアである。去年はここまてひどくはなかつたのだが……。なかには、川の流れていたところが土で埋まって、赤い沼になってしまっている場所もある。

午後三時、懐かしのメンドロ村に着く。「うつきや、ダメだ、この川も赤いわ」「悪いほうの子感が全部当たってるね」去年きたとき、村の川は川底の砂の一粒一粒がみえるくらいきれいだった。どうしてこんなに急速に川が汚れてしまったのだろうか、と思つて調べてみたら、村のさらに奥に、伐採した材木の集積場ができていたのだ。つまり、それはどこの周辺の木を切つたということだ。

このセノイ族の話は、環境問題というのはぜんぜん本筋じゃなくて、あくまで夢の文化



これはおれなくする。これは魔よけの一種で、悪い精霊が道をとって村にはいないようにするのだという。人間は道のはしっこをとる

った。また長老クチルの弟でもある。「やあまたきたのか」ということで、熱いミルクティーでもてなされる。

さっそくわれわれの宿が提供された。若いマツトナウ夫婦があたりらしく建てたバンブーハウスである。村の有力者の命令だから否も応もないわけで、亭主のマツトナウがラタン(藤)採りに行って留守だというのに、われわれはかれの家に腰を落ち着けた。一応顔見知りではあるのだが、むくつき男四人がトランクを山ほどもってはいって来たのだから、奥さんはさぞかし怖かったことだろう。

精霊信仰にもとづく夢解釈

三月九日、クチルじいさんの家に向かった。去年クチルじいさんには「夢のなかではトラと仲良くしろ」と教えられたのだが、その《トラ・シリーズ》の夢を今年になってからまたみたので、話を聞こうと思ったのである。それはこんな夢だった。

《わたしは自分と仲の良いトラといっしょに動物園のような場所へ行く。なかにはたくさんライオンや野獣がいる。そいつらはわたしを襲おうとするが、仲の良いトラがそいつらと戦ってくれる。》

ところが、わたしと仲良かったトラが、わたしを追いかけてくるのだ。わたしは恐ろしくなって木の上へ逃げたが、トラも木の上へ登ってきて、そこでつかまってしまふ。

われわれもついていったビス・ライトの煙を旨そうにくゆらせながら、じいさんはわたしの話を聞いていた。そして、通訳の先生に何度か内容を確認すると、強い調子でこういった。

「そのトラは、べつにおまえを襲って噛もうとしているわけではないんだ。かれはもうおまえと友だちになっていて、追ってきたのは、

じやれて遊びたいだけなのに、どうしてトラを恐れるんだ。」

一喝、という感じである。

じいさんはこのあと「だからおまえはトラといっしょに遊んだり、話し合ったりしなさい」といい添えた。わたしは長老クチルのボジティブな夢解釈と、その夢指導の巧みさに舌を巻いた。

このように、クチルじいさんをはじめセノイの人たちは、夢のなかでは友好的であれとか、積極的に行動しろとか、まったく「夢コントロール」らしきことを教えてくれるのだ。それなのになぜ、かれらは「夢をコントロールしている」といわないのだろうか。

このあと、クチルじいさんやマルーなどに話を聞き進めていくうちに、どうもこういうことではないか、という構図が浮かびあがってきた。それは、無数の動物たちに囲まれて生活するかれらの、アニミスティックな世界観と深く関わっていた。

かれらは、夢のなかにはあられる相手と、友好関係を結ぶように勧める。かれらにいわせると、夢のなかにはあられるトラや鳥などの動物たちは、ジャングルの精霊なのである。

そして、こうした精霊たちのなかには、ある特定の人間と夢をとおして仲良くなり、有用な情報や、病気を治すパワーを与えてくれるモノがいる。一種の守護霊だが、セノイはこうした守護動物霊を「グニ」とよんでいる。

夢はいわば、こうした大自然の教師たちから知恵や力を授かるための「教室」なのである。だからかれらは夢のなかで積極的かつ友好的になるのであって、べつに「夢をコントロールしているわけではない」のだ。

それではかれらは「夢コントロール」をしていないのだろうか。かれらは確かにアニミスティックな動物で

夢について語りあい、また夢に積極的に関しようとしている。ところが傍からみていると、結果的にはそうした行為が、夢の内容をポジティブな方向に変え、精神的な健康を保つことに役立つように思えるのだ。これはべつない方をすれば、かれらはまったく意識せず、無自覚のうちに「夢コントロール」とよばれる方法を実践していた、ということになる。

キルトン・スチュアートやガーフイールド女史の書いたものを読んでみると、あたかもセノイ族が自覚的に夢コントロールの方法を理論化し、かつ実践しているように思えてしまう。しかしわたしのみた範囲では、どうしてもそうは思えないのだ。

ここからはわたしのまったく勝手な推論にすぎないのだが、スチュアートは、セノイたちが無意識にやっていたことを、意識的にやっていたこととして、論文にして発表したのではないか。理論化したのは、本当はセノイではなく、スチュアート自身ではなかったのだろうか。

いずれにせよ、この文章を読んでいただいても判るように、わたしは哲学の出身で、人類学はまったくのトーションロ、門外漢である。ぜひ専門の方に徹底的に調査していただいで、ご教示願えればと思ふ。

夢のなかでは快樂を目指しなさい

さて、同性愛の夢とか近親相姦の夢というのは、どうもフロイト流の人たちに飛びつかれそうだし、なにより体のなかに暗いしこりを残す。ある人は、なんとも情けない顔で「まったく妹とやっちゃう夢をみちまったよ」なんて告白してくれた。こういう夢で人知れず悩んでいる人もおおいことだろう。

そんな意味でわたしは、スチュアートの報

いつまでも四人で唸っていてもしょうがないというので、村の有力者、マルーの家に行く。かれはこの村のハラ(シャーマン)で、夢にも詳しく、去年はいろいろと教えてもら

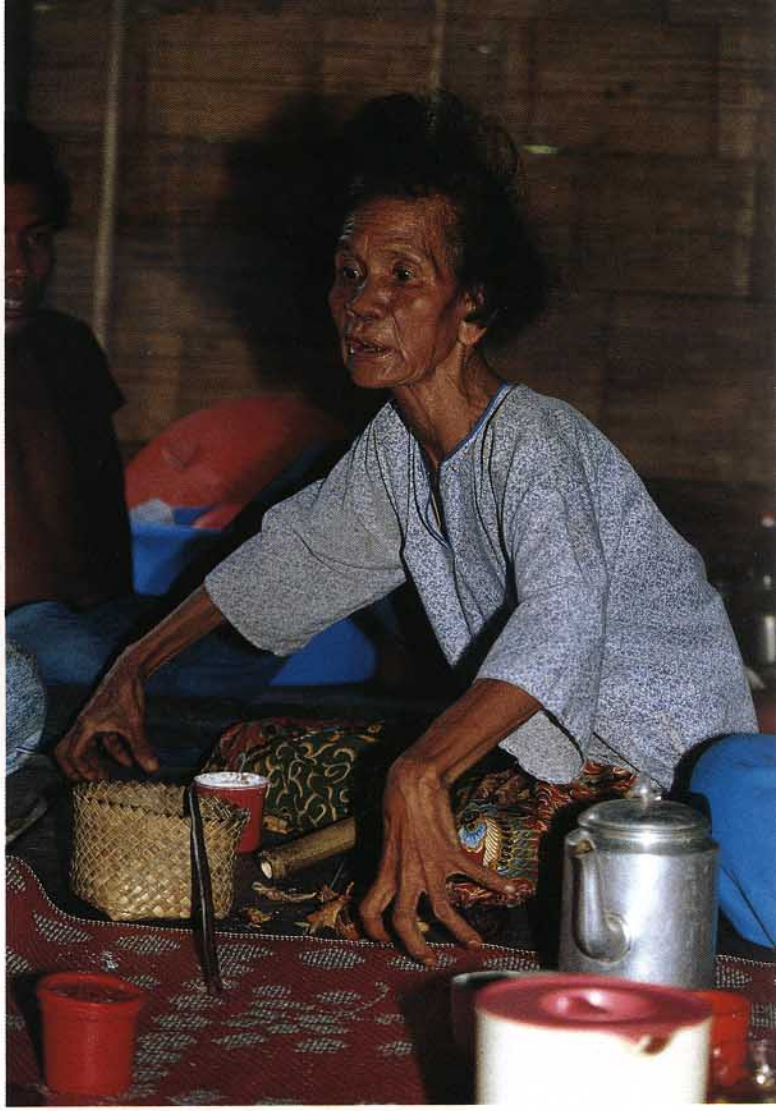


↑↓精霊の像を彫るブンブン村の彫刻家・ピオンさん。像には伝統的なタイプと、ピオンさんが創作したものがある。下は伝統的なトラの精霊の像。口には玉を喰わせ、手にはランタイとよばれる飾りをもっているが、いずれも強い霊力の象徴である。この像を部屋に置くと悪い霊ははいてこれなくなるという



↑ある日、彫刻刀でケガをした。すると夢のなかにサソリの精霊があらわれ、「わたしの像を彫らないとまたケガをするぞ」と警告した。そのとき彫ったサソリの像と傷口をみせるピオンさん

→ハラ（シャーマン）の母親。息子が治療をしているとき、患者にとりついたトラの霊が、苦しんであばれた。そのときの様子を身ぶりて説明してくれた



告した性に関するセノイの夢理論を、なかなか画期的だと思っていた。ガールフレンドが「夢のなかでは快楽を目指さない。たとえそれが同性愛や近親相姦であつても、人は夢のなかで過剰な愛を得ることはないから、十分に快楽を味わい尽くさない」とまとめている理論である。

ユング流の人たちにいわせると、夢のなかに出てくる男や女というのは、夢をみている人の人格の一部なのだそう。だとすれば、夢のなかで二人の自分を合体させて人格を統合するというのは、なかなかのアイデアではないだろうか。なにより、そういうタブーの夢をみても暗い気分にならないのがいい。

だがセノイは本当に性夢についてそんなふう考えているのか。

そんなわけでわたしは、この点についてハラのマルーに聞くチャンスを探っていた。しかし話が話だけに、変なタイムリングで聞くとなんか「こいつ」と思われてしまう。

最後のチャンスは、われわれのお別れパーティーのときにきた。この席で日本側は、ソバやテン普拉、日本酒などを振るまつて、座を盛りあげた。やがて場が崩れてくるころあいを見計らい、意を決して、ます

「男同士でキスをする夢をみる人がいるんだが、どういう意味があるのか」

とマルーにたずねてみた。アダムがおどけて「そのサインはホモセクシアルだ」という。それを聞いたマルーは「いや、それはホモセクシアルのサインではないよ」と重々しくいった。

「男とキスをするという夢は、とてもいい夢なんだ。というのも、キスをした相手のその男は、友だちにならなかつたからなんだ。ちよどわたしがききたちと良い友だちになつていようにね。」

だから、きみたちが日本に帰つてわたしとキスをする夢をみても、それはわたしが友だちになりたいと思つてるからで、ホモのサインではないんだよ。

なるほど、うまいものである。

このマルーの反応は、スチュアートが報告した「夢のなかでは同性愛を恐れるな」というセノイのセオリーと一致している。断言はできないが、どうやらかれらは、夢のなかではタブーを恐れず、積極的に行動するべきだと考えているようである。

ここでもう一押し「男どうしてやっちゃやう夢は？」とか「近親相姦の夢は？」などとたずねようと思つたのだが、どうも場の雰囲気がいけない。やっぱり友情は大切。ぼくたちも友だち、国際親善」というようなニコニコした健全なものになつてしまい、結局聞けなかつた。残念。

「友あり、遠方よりきたる」の兆し

翌朝、メンドロ村を出て、次の目的地チャンカー村を目指す。メンドロ村にきたときはびつくりしていたマツトナウの奥さんも、われわれが出ていくときはさすがに名ごり惜しげだった。特にドクター北村は「先生が帰るとわたし泣いちゃう」と奥さんにいわれたそうである。それもそのはずで、彼女の病気の子どもを治療したり、大量の薬をプレゼントしたりと、相当点数を稼いでいたのである。辺境でモテるには医者になるにかぎる、と痛感したものだつた。

チャンカー村というのは、青年海外協力隊時代にドクターが足繁く通つた村で、バガリンダムさんという面倒見のいい村長さんがいるらしい。そして可愛い美人姉妹が（一〇年以上前の話だが）いるというのだ。われわれはチャンカー村に先生の子どもがいるんじゃない



ないかと噂しあった。まったく医者になるべきだった。

日本を出て一〇日。このころになると、日本語であまり複雑なことが考えられなくなってくる。暑い気候と、旅から旅への能天気な日々、そして、英語、マレー語、セノイの言語のチャンポン生活に慣れてくるからだ。ダジャレのレベルも低くなる。

たとえば、こちらではコーヒーのことをコピというのだが、

大泉「高田さん、コピ取って」

高田「はいはい、コピ、コピ、コピの三田」

こういう最低のダジャレをいうのが、日ごろ言語生活のレベルが低いわたしならまだしも、高度な言語活動をする編集者の高田さんなのだ。わたしはこれを病気として認定し「熱帯性日本語後退シンドローム」と名づけた。

それというのも、高田さんだからまだあの程度のシャレのレベルで済んでいるわけで、他の三人のダジャレはもうヘロヘロ、箸にも棒にもかからないのである。こんな旅をつづけて、チャンカー村に着いたのが三月二日。

夕刻、歓迎の宴となる。村長のバガリンダムさんが、

「今朝大きなトラが目の前を行ったりきたりする夢をみたんだ。これはふるい友人がたずねてくるときによくみる夢のサインなんだよ。誰が来るのかと想っていたら、ドクターがきた」という。われわれが「おーっ」と驚くと、それを聞いていた五人くらいの子どもたちが、意味も判らず「おーっ」と真似をしたので、爆笑になった。くりくりした目に、もつくりした頬、美人姉妹の子どもたちである。

このバガリンダムおじさんが、なかなか話のわかるおもしろい人だった。顔を見るとヒゲをはやしたラテン系の色男みたいなのだが、村民の信頼は厚いらしく、夢の話にも詳しい。

↓「夢のなかのトラを恐れるな」と語るクチルじいさん。バンブーハウスの壁にうつる影が、まるでじいさんの本体のように見える

↓ランプの幻想的な光のなかで、低い声で夢について話しあう。リラックスした時間。ランプをみていると、だんだん眠たくなっていく



ガメラが夢で教えてくれること

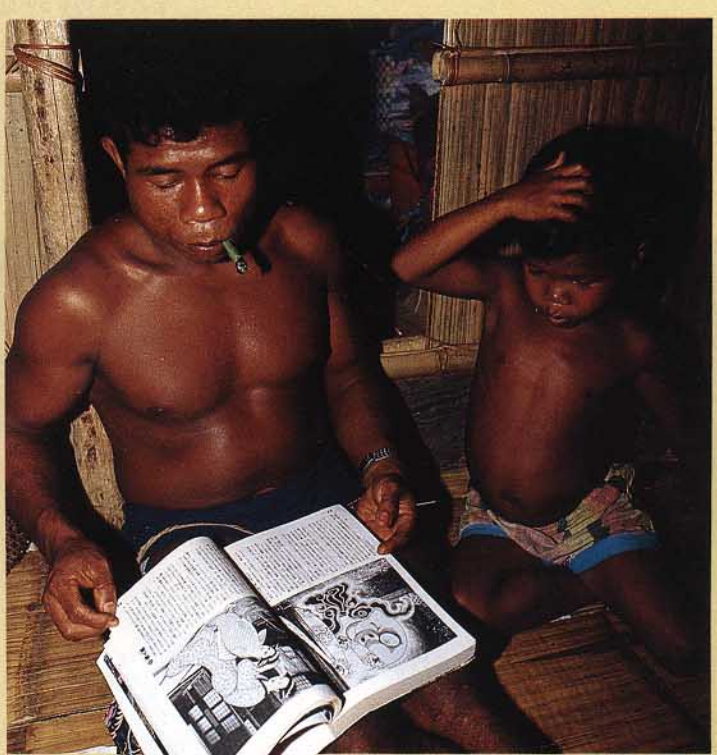
さて、この旅に、わたしは塩化ビニールでできたガメラとゴジラの人形をもってきた。なぜガメラとゴジラかといえば、前にもちよつと書いたが、この二匹の怪獣は夢のなかにあらわれてわたしに暴行を加え、ときおり、わたしを取って食ったりするからである。たとえばパラパラと日記帳をみていると、今年の二月二〇日のページには「朝、ガメラに追いかけられ、後ろから火炎を吹きつけられる夢。ガメラとは死（の象徴）か？」とある。これはものすごく怖い夢だったので、じつにネガティブな解釈がしてある。

わたしは夢をおしてかれらと交流しようと思つてここまでやってきたのだから、わたしの夢生活をかれらに具体的に説明できなければ話にならない。けれどもガメラとかゴジラとかを、口でいくら説明したところでピンとこないだろう。そこでこの塩ビの怪獣人形の登場となったわけである。

ところが、メンドロ村でゴジラ人形のほうをだしたら、これが相当に恐ろしいらしく、女、子どもたちは「ギャー」といっていつせいに逃げてしまった。眠っていた子どもたちまで起きて泣きだすわで、バンブーハウスはしばしパニック状態。とうてい夢の話などできる雰囲気ではなくなつてしまったのだ。どうもゴジラという怪獣には普遍的な恐怖感があるらしい。

そんな事情もあつたので、バガリンダムさんにはガメラ人形のほうをだしてみた。するとこちらのほうはえらくすんなりと受け取られた。

「このカメはムービースターで体長は六〇メートル、口から火を噴き、手足を引っこめくるくる回りながら空を飛ぶことができる」な



怪

獣人形のほかに、人気漫画のキャラクター・グッスや、浮世絵を描いたコースターなど、今回の取材では夢と象徴にかかわるさまざまな「日本」をもちこんだ。しかし老若男女を問わずいける日本妖怪大全。これをだすと、どこに行っても引っぱりだこになり、人だかりができてしまうのだ。しかも長時間にわたって「いったいこれはなんのハントウ（精霊、お化け）なの？」と説明を強要されるので、最後のころには辟易したほどである。多分、かれらの日常に密着している無数の「ハントウ」たちと、日本の妖怪の概念が、うまくかみあつたせいだろう。とりわけ興味を示したのが「カッパ」であった。

「それはきみのグニ（守護動物霊）なんじゃないか」
ガメラが守護霊とは！ しかも夢のなかのガメラは、わたしを守ろうとしているのではなく、襲おうとしているのだ。グニといつたいなにをいいたすんだらう」とわたしは思った。だいたいガメラは想像上の怪物じゃないか。
バーチオン君は静かに話しはじめた。
「このガメラはきみの夢に何度も出てきて、きみを追いかけるという。ぼくら（セノイ族）の考えでは、それはきみを襲おうとしているのではない。」
「大きな怪物がワツと近づいてくるから、ぼくにはどうしても襲ってくるように思えるんだけど。」
「恐れてはいけません。ガメラはきみに興味をもつたから、夢のなかに何度も出てくるんだ。かれは友だちを捜しているんだ。だからかれと友だちになればいいのさ。かれと友だちになれば、きみは勇敢な人間になれるんだ。」

「それがいいんだよ。まずは相手に向かって話しかけるんだ。次に、二人で歌を歌ったりダンスをしたりするんだ。」
わたしはガメラと二人で歌を歌ったりダンスをしたりするシーンをイメージし、なにか複雑な気分になった。あまりにもありえないシーンだからである。しかし、それがあまりにとっぴょうしもないので、しまいはおかしくなってきてしまった。こういう気分になってくると、ガメラに対する恐怖感もほぐれてきて、むしろ親近感がわいてくる。
ジャングルの夜。子どもたちはすでに眠ってしまい、バーチオン君の静かな声だけがバンブーハウスに響いている。ときおり、虫の声がする。
バーチオン君はガメラ人形を片手に、わたしに向かつて熱のこもった声で話した。
「そんなふうには夢をみていない、今度はガメラがいろんな情報や、あたらしい歌、ダンスのアイデアなんかを教えられるようになるんだ。だから教えてもらおうまで、その夢をみつけるといいよ。」
なるほど、友だちになつたうえに、なにか教えてくれるというんだから、そうまでいわれればガメラの夢も楽しみにするというものである。そしてバーチオン君は「とにかく夢のなかでは、きみのほうから積極的に仲良くしたほうがいいんだ」とかれらの夢見のセオリーを繰り返して、につこりと笑った。とても品のいい笑顔だった。

どと説明する。かれらは「おーっ」という顔で聞いている。

「じつはこのガメラに追いかけてられて、火を吹きかけられる夢をみるんだけど。」

わたしがこう言うと、意に反してバガリンダムさんは「それはいい夢をみたんだ」という。なにがよい夢なのか。わたしは夢のなかでヒイヒイいながら逃げまわり、起きてからもあぶら汗をびっしょりかいていたというのに。

「どうしてこのガメラに火を吹きかけられるのが、いい夢になるわけ？」

「火を吹きかけるといふのは、きみを強くしようとしているんだ。火を吹きかけて、きみを鍛えようとしているんだよ。」

わたしはあつと息を呑んだ。「火を吹きかけられる」というネガティブなイメージが、一

瞬のうちに「火で鍛える」というポジティブなイメージに置き換えられている。その手際が、あまりに鮮やかだったからである。バガリンダムさんは、わたしをじつとみつめながら話をつづけた。

「そのガメラはきみにプレゼントをしようとしているんだ。もしきみがガメラを恐れずに仲良くなることができたら、きみは勇氣と強さを手に入れることができるんだ。だからこの夢はいい夢なんだよ。」

自信に満ちた話しかたである。
わたしは、

「このガメラは何度も夢にあらわれて、わたしを襲おうとするんだ。いったいどうしたらいいだろう」

とたずねた。すると、隣りて話を聞いていた若きシャーマン候補のバーチオン君は、

「友だちになるには、二人で楽しいことをや

るのがいいんだよ。まずは相手に向かって話しかけるんだ。次に、二人で歌を歌ったりダンスをしたりするんだ。」
わたしはガメラと二人で歌を歌ったりダンスをしたりするシーンをイメージし、なにか複雑な気分になった。あまりにもありえないシーンだからである。しかし、それがあまりにとっぴょうしもないので、しまいはおかしくなってきてしまった。こういう気分になってくると、ガメラに対する恐怖感もほぐれてきて、むしろ親近感がわいてくる。
ジャングルの夜。子どもたちはすでに眠ってしまい、バーチオン君の静かな声だけがバンブーハウスに響いている。ときおり、虫の声がする。
バーチオン君はガメラ人形を片手に、わたしに向かつて熱のこもった声で話した。
「そんなふうには夢をみていない、今度はガメラがいろんな情報や、あたらしい歌、ダンスのアイデアなんかを教えられるようになるんだ。だから教えてもらおうまで、その夢をみつけるといいよ。」
なるほど、友だちになつたうえに、なにか教えてくれるというんだから、そうまでいわれればガメラの夢も楽しみにするというものである。そしてバーチオン君は「とにかく夢のなかでは、きみのほうから積極的に仲良くしたほうがいいんだ」とかれらの夢見のセオリーを繰り返して、につこりと笑った。とても品のいい笑顔だった。

眠りこける子どもたち。その上をネコがまたいでいく。学校のないこの村で、子どもたちは川やジャングルで心おきなく遊び、眠りたいだけ眠る。いったいどんな夢をみているのだろうか

く下>ガメラで遊ぶ子ども。「ガメラは2本足で歩くんだ」と何度教えても、四つんばいになってしまう



ルギーを、ポジティブな方向に変えているのだろう。セノイの夢の文化というのはなかなか侮れないな、と改めて思った。

夢理論のきのう・きょう・あした

そんなわけで、行きあたりばったりもいいところなのだが、二年間に渡って一〇以上のセ

ノイの村をおとすれ、夢の話聞いた。そこで気になったのは、四〇代以上の人はたいいてい夢にも詳しい、自分の夢のサインももっているのだが、若い人たちがほとんど自分たちの夢の文化に興味をもっていないことだった。

ひとつには、開発の影響で都市化が進み、若い人たちの目がどうしてもロックやジーンズに象徴される「モノカルチャー」に向いてしまうことが原因だろう。また、森が伐採でダメになり、狩りの文化が衰退するなかで、狩猟採集生活に深く関わっている夢の文化への興味も低くなっているのだと思う。

旅の終わりに、ずっとガイドをしてくれたアダムに、このままいくとセノイの夢の文化は消えていってしまうのではないかとたずねてみた。

「いや、なくならないよ。夢の文化がなくなったら、ぼくたちの民族は消えてしまうよ。モダンな生活のなかでも、夢を生かすことはできるはずなんだ」。

アダムは穏やかな表情でこう答えた。アダムの言葉どおりに、かれらの夢の文化が生きつづけていくようにと、祈らずにはいられない。



ただ、嬉しいことに、ガールフィールド女史のように心理学の立場で、セノイの夢理論を継承し、あたらしい展開を目指す人もいます。また、大脳生理学では、スタンフォードのラバージュ博士や、日本の鳥居鎮夫東邦大学名誉教授などが「明晰夢」という見地から、セノイの夢理論を再評価している。わたし自身、自分の夢生活にかれらの方法を取りこんでいるわけだから、こんな形で、セノイの夢文化は世界のあちこちで生き延びていくかもしれない。

そういえば最近、またガメラの夢をみた。わたしは仲間たちと「ガメラ王国」に行き、そこでガメラ王とガメラ聖者に出会うのだ。この二匹のガメラはわたしたちを夕食会に招き、なにか海草のようなものを食べながら穏やかに談笑する。そして最後にガメラ王は「人間がこんなに友好的だとは」と感心したようにいうのである。

この夢をみたとき、またマレーシアに行つて、セノイにこの夢について聞いてみたいなと思つた。かれらはきつと「それはいい夢をみたもんだ」と喜んでくれることだろう。